

【研究資料】

# 植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法 ——植民地台湾との相互参照を加えて——

小林善帆

## はじめに

近代日本は朝鮮に対し、一九〇六（明治三九）年統監府開設を経て、一九一〇（明治四三）年八月「日韓併合」、朝鮮総督府を設立した。

同地の文化・教育に関する日本における研究史として駒込武<sup>(1)</sup>、稲葉継雄<sup>(2)</sup>、太田孝子<sup>(3)</sup>、朴宣美<sup>(4)</sup>、新井淑子<sup>(5)</sup>をはじめとする研究がある<sup>(6)</sup>。しかしいずれも日本の伝統的文化の受容という観点を持つものではない。同文化のなかでもいけ花・花（華）道（以下「花」）、茶の湯・茶道（以下「茶」）、礼儀作法（以下「作法」）の受容は、日本人としての精神修養という面を持ったことから、植民地における文化・教育に影響を及ぼしており、植民地朝鮮においても検討する必要があると考える。また植民地における他民族の場合、

「花」「茶」「作法」という日本の伝統的文化と直接関わることができたのは、主に女学校・高等女学校という女子中等教育の場であった<sup>(8)</sup>。いっぽう、朝鮮・台湾は同じく帝国日本の植民地でありながら、それらの取り入れは共通点ばかりではない。

これらのことから本稿は、植民地朝鮮（以下、朝鮮）の女学校・高等女学校とそこにおける「花」「茶」「作法」をはじめとする日本の伝統的文化の受容実態を明らかにし、さらに植民地台湾を中心に日本の他の植民地との相互参照を加え、植民地間の共通点、相違点を認識した上で、そのありようを検討することから植民地朝鮮を考えるものとする。

ここで近代日本の女子中等教育（女学校・高等女学校）における「花」「茶」「作法」について確認する。同教育を規定した高等女学校令の施行前である明治初中期において、「作法」は女子の嗜みとして適宜教えられ、「花」「茶」も教えられることがあった。

しかし一八九九（明治三二）年二月高等女学校令（勅令第三三三号）公布以後、「作法」は学科目「修身」の細目として位置づけられ、原則として週に一回程度教えられるようになったが、学校教育とは別の教育体系を持ち、「嗜み」「修養」としてはあるが、「遊芸」という要素も持つ「花」「茶」は、学科目ではなく、一九〇三（明治三六）年、土地の状況により必要な場合に限り正科時間外に教えてもかまわないという、書面通知である通牒（文部省普通学務局・卯普甲三四八七号）が出されたにすぎなかった。<sup>9)</sup>しかし当時世間一般に、結婚前の娘が修得すべきものとしての「花」「茶」に対する根強い支持があった故に、このような通牒が出されたともいえる。

また、朝鮮において当初「在朝内地人」（以下、日本人）は、内地に準じて教育を行い、「日韓併合」後の一九二二（明治四五）年三月、朝鮮公立高等女学校官制・規則公布、同年四月施行は、内地における高等女学校令・同施行規則と本旨、修業年限、教科、編制等と大体において同一であった。<sup>10)</sup>いっぽう朝鮮人に対しては、一九二二（明治四四）年八月、朝鮮教育令（勅令第二二九号）を公布、女子中等教育は女子高等普通学校とし、三年制ほかが定められていた。

以後、一九二二（大正一一）年二月、第二次朝鮮教育令（勅令第一九号）は「第一条 朝鮮ニ於ケル教育ハ本令ニ依ル」と、日本人・朝鮮人両者同一の教育令として出され、日本語を常用する者、せざる者の区分を新たに設けた。さらに一九三八（昭和

一三）年三月第三次朝鮮教育令（勅令第一〇三号）公布により、日本語を常用せざる者を対象とする「女子高等普通学校」を、日本語を常用する者と同様の「高等女学校」に改組改称し、女子中等教育を制度上一本化した。

それは実際には日本人を主とした高等女学校、朝鮮人を対象とした女学校・高等女学校、「内鮮」（日本人・朝鮮人）共学の高等女学校の大きく三通りにわかれたといえよう。

なお、史料の表記については新字体・現代仮名遣いを使用した。

## 一 日本人を主とした高等女学校

### 1 釜山公立高等女学校（釜山）

#### (1) 沿革

朝鮮において、日本の女子中等教育機関が最初につくられたのは釜山であった。一九〇一（明治三四）年四月実施の釜山公立小学校女子補習科二年制を拡充して、一九〇六（明治三九）年四月一日、釜山公立高等女学校三年制を創立した。しかし当初、同年一〇月新築の釜山公立高等小学校に仮住まいであった。翌一九〇七（明治四〇）年に釜山居留民団立釜山高等女学校と改称、四年制となり、高等女学校令により設置された府県立高等女学校と同等と認められた（文部省告示第二三三三号）。一九一〇（明治四三）年六月土城町に新築校舎が完成、高等小学校から移転した。

一九二二（明治四五）年四月、朝鮮総督府高等女学校規則施行により、釜山公立高等女学校と改称した。生徒は日本人を対象としたが、第二次改正朝鮮教育令施行後の一九二一（大正一一）年四月以降、若干名の朝鮮人を受け入れるようになった。<sup>11</sup>

一九一七（大正六）年四月からは、本科進学課程として補習科一年制が置かれた（学科目は修身・国語・家事・裁縫・体操）。しかし一九二〇（大正九）年三月に廃止している。理由は時期尚早であったためという。一九二五（大正一四）年四月学則改正により五年制とするものの四年制も存置した。その後一九三二（昭和六）年の学則改正により、一九三二（昭和七）年四月から五年制のみとなった。<sup>12</sup>現在、釜山女子高等学校。

## (2) 学校資料・卒業アルバムから

一九〇七（明治四〇）年四月施行の学科課程によれば、学科目は、修身（人倫道德ノ要領、「作法」）・国語・歴史・地理・数学・理科・図画・家事・裁縫・音楽・体操・手芸・教育・英語・韓語。このなかで教育（第三・四学年のみ週一時間）・英語（週三時間）・韓語（週一時間）は随意科目で、これらを履修しない場合は裁縫を履修した。「韓語」とは韓国語（朝鮮語）のことで、朝鮮人教師による会話を主とした実用的なものであった。しかし韓国語は、一九一四（大正三）年の学科課程改正時には、学科目から外されている。「花」「茶」に関しては何も記されておらず、開校当初は設置されなかったと考えられる。

「作法」は、高等女学校令では学科目「修身」の細目としてあり、仮住まいをした釜山公立高等小学校校舎は、普通教室のほか理化学室、音楽室、作法室、家事科室、裁縫室、洗濯場等も備わり、日本における郡立の高等女学校よりも優れていた<sup>13</sup>ということから、作法室は床の間・違い棚や書院付きの本格的な和室であり、そこで当初高等女学校の「作法」が教えられたと思われる。また同校では一九〇七（明治四〇）年、作法科及家事科教授法の視察研修のため神戸・大阪・京都地方への出張も行われており、「内地」（植民地ではない日本固有の領土）同様もしくは、それ以上の熱心な取り入れであったことが思われる。

「花」「茶」は、通常「内地」の高等女学校の場合、開校数年後に「余科」として放課後希望者を対象に設けることが多かった。同校では一九二二（大正元）年十一月、余科教授規定を制定、学科課程以外に有志生徒のために校友会の主宰する活動（現在の部活動的なもの）として、「一筆曲科・二茶儀科・三生花科・四刺繡科・五造花科」の五科が設けられた。修業年限は箏曲のみ三ヶ年、ほかは二ヶ年であった。<sup>15</sup>

また「学校年表」<sup>16</sup>から、

一九一四（大正三）年三月 科外学科（余科）修業式、茶

儀科・箏曲科修業証明書授与

式挙行

一九二二（大正十一）年一月 寄宿舎において茶の湯教授開

始

一九二九（昭和四）年二月

生花課外指導。同年六月、四、

五年生希望者の生花指導会開

催

一九三〇（昭和五）年二月

四、五年生希望者の生花指導

会開始、三日間。

同年六月

五日、生花指導四年生希望者、

六日、生花指導五年生

とあるのが見出され、「余科」としてのほか寄宿舎生徒に「茶」、

「花」は「生花指導会」も行ったことがわかる。また高学年を対象としていることから、花嫁修業的な意味合いがあったと思われる。四年生は希望者であったが、五年生は全員を対象としている。

学校資料によれば、一九二九（昭和四）年六月一日付で、慶尚南道・那須房太郎へ、校友会長（学校長が兼任）より「茶道並ニ華道教授ヲ囑託ス」との辞令が出されている。<sup>(17)</sup>この那須房太郎の採用は、四、五年生希望者の生花指導会開催開始と合致する。

いっぽう一九三四（昭和九）年三月の卒業アルバムが現存するが、そこには「花」の写真が掲載されている。通常「外地」（植民地）にあっても、日本人を対象とする高等女学校の卒業アルバムに、「花」「茶」の写真が掲載されるのは珍しい。卒業アルバムに掲載される写真はその学校の主張すべき教育内容であり、日本人にとって「花」「茶」修得は家庭でも行えるもので、主張すべきものではないからである。ここでは外地にあっても嫁入り前の

娘たちに日本人としての嗜みを身につけさせているという主張であったと考える。また「花」の取り入れに積極的な教師の存在、学校長の方針などが考えられる。

ほかに同年表から一九二三（大正一二）年に生徒習字競励会、一九二八（昭和三）年六月に能狂言会開催、校友会弓道部設置、一九三三（昭和八）年七月には弓道部の暑中稽古開始なども見出せる。

### (3) 聞き取り・アンケート調査から

一九三七（昭和一二）年三月卒業者は、「作法」のなかで「茶」の稽古一通りを習った。作法室は三〇畳位の床の間のある部屋で、「茶」の道具も置いてあった。「花」は部活動にあった。また一九四一（昭和一六）年三月卒業者は、「花」「茶」とともに希望者に放課後教えられていたという。<sup>(18)</sup>

### (4) 釜山婦人会附属成錦女学校

釜山婦人会附属成錦女学校は一九〇七（明治四〇）年、釜山婦人会の付帯事業として設立された。本科学科目は修身・国語・算数・裁縫・家事・音楽、随意科目として手芸・養蚕・生花・茶儀・割烹があった。裁縫が主で週三〇時間のうち二三時間があてられ、随意科目を履修する場合は裁縫の時間が減らされた。同校の場合、高等女学校令に基づく学校ではないため学科目・随意科目の内容は同令によるものでなく、任意のものであった。

しかし、同校は同会の愛国婦人会との合併により廃止となり、一九〇九（明治四二）年四月より、釜山居留民団立高等女学校技芸専修科二年制として校舎校具等が引き継がれた。このとき随意科目としての「花」「茶」はなくされている。その後同科は一九一四（大正三）年三月廃止となった。<sup>19)</sup>

以上のことから同校の「花」「茶」は、一九一二（大正元）年から余科として部活動のように放課後希望者に教えられ、その後「茶」は寄宿舎でも取り入れられ、「作法」でも教えられることがあった。特に「花」は昭和初期、五年生全員を対象とする課外指導会の開催、卒業アルバムへの掲載ということから、同校において課外ではあるが熱心に取り入れられたと考えられる。

## 2 京城第一公立高等女学校（ソウル）

### (1) 沿革

一九〇八（明治四二）年三月、京城居留民会の議決を経て設立決定。京城居留民団立高等女学校四年制として同年四月、南大門西側城壁内の一地域に校舎竣成・始業、五月開校式、九月在外指定学校となる。一九〇九（明治四三）年二月、南山町二丁目到校舎新築移転、一九一〇（明治四四）年六月補習科（本科進学課程）設置、一九一二（明治四五）年四月、京城公立高等女学校と改称。一九二二（大正一一）年四月、貞洞一番地の新築校舎に移転、同年五月京城第二公立高等女学校新設に伴い、京城第一公立高等女学校と改称した。一九二三（大正一二）年十一月補習科

を廃し五年制を導入。一九二七（昭和二）年度入学者から五年制のみの課程とし、一九三一（昭和六）年四月、四年制を廃し五年制を完成させた。<sup>20)</sup>生徒は日本人を対象としたが、若干名の両班（ヤン）であつたという朝鮮人子女が在学していた。一九四五（昭和二〇）年終戦に伴い廃校。

### (2) 校友会誌・卒業アルバムから

『白楊 創立二十五周年記念号』<sup>21)</sup>からは、薙刀のほか一九三三（昭和八）年頃、習字・能・仕舞・日本舞踊なども積極的に行われていたことがわかる。しかし「花」「茶」に関しては全くふれられておらず、記念展覧会の生徒作品展示写真のなかの作品としても見出せない。いっぽう統計表の展示において、身体発育比較表の比較を東京府立第一高等女学校（現、都立白鷗高校）、京都府立第一高等女学校（現、府立鴨沂高校）、大阪府立大手前高等女学校（現、府立大手前高校）という「内地」屈指の名門高等女学校と行っていることから、同校に名門高等女学校としての自負があつたことが窺える。

また、一九三六（昭和一一）年三月『卒業記念写真帖 第二十八回』には、行事の写真として運動会、薙刀、運動部による数々のトロフィー、朝鮮神宮参拝、割烹・稲刈・田植実習の写真が掲載されている。いっぽう一九四一（昭和一六）年三月『卒業記念写真帖 第三十三回』には傷痍軍人との交流、運動会（毒ガスマスクを使用したゲームを含む）、薙刀、金剛山旅行、修学旅行、

音楽会、縫製の勤勞奉仕の写真が掲載されている。両者の内容の相違から、戦争の影響が具体的なものになってきていることがわかる。

薙刀は両方のアルバムにあるが、「花」「茶」「作法」の写真は、やはり両方ともに掲載されていない。<sup>(23)</sup>

### (3) 聞き取り・アンケート調査から

一九二四（大正二三）年四月入学者は、「作法」の時間は紋付きに白足袋の先生から歩き方、「茶」の作法等を教えられた。四五分間の正座で足の痺れを如何に克服するかが最大の問題であったという。また時々数人の母親を招き一の膳、二の膳、三の膳と捧げ持ち戻るといふ内容の作法の時間もあつて、皆切に母親が来ぬことを願つたという。<sup>(24)</sup>

一九三六（昭和一一）年四月入学者複数からの聞き取りから、「作法」は「家事」の時間と同じであつたように記憶しているという。「花」「茶」は、放課後希望者に池坊の「花」と表千家の「茶」が教えられた。しかしむしろ高等女学校卒業後に習うものであつたといひ、卒業後に清和女塾で茶の湯を習つた者たちもいる。<sup>(25)</sup>

清和女塾は、日本の日蓮宗社会改良団体である「緑旗連盟」<sup>(26)</sup>の経営、塾長は津田よしえで表千家の「茶」を教え、ほかに裁縫・修身・国語・歴史・美術鑑賞・音楽・日本料理などが教えられた。「花」は茶席の花が教えられる程度であつたという。修業

年限は一年、一九三六（昭和一一）年四月に入学した同塾三回生は、二五名中二二名が京城第一高女卒業生、残り三名が京城第二高女卒業生であつた。「茶」のみでも教えており、男性会社員や上流家庭の主婦や娘が習いに來ていたという。<sup>(27)</sup>

以上のことから同校における「花」「茶」は、一九三五（昭和一〇）年前後から放課後の活動として取り入れられたと思われる。またむしろ高等女学校卒業後に修得するものであつた。「作法」は、「家事」「茶」とともに一連のものとして教えられたことがわかる。

### 3 そのほかの日本人を主とした高等女学校から

#### (1) 京城第二公立高等女学校（一九三二年五月創立、ソウル）

一九三三（昭和八）年入学の者によれば、「茶」「花」は放課後教えられていた。先生は外部の人だった。「茶」は作法室、「花」は普通教室で行われていた。作法室は校舎二階にあり、床の間・違い棚などもあつた。「作法」は立ち居振る舞い、挨拶、茶の進め方などを習つた。<sup>(28)</sup>また一九三六（昭和一一）年入学の者は、家事の時間に作法室で立ち居振る舞いを習つた。校友会活動（部活動）で池坊の「花」と「茶」が教えられていたという。<sup>(29)</sup>

#### (2) 光州大和公立高等女学校（一九三三年四月創立、全羅南道）

一九三五（昭和一〇）年ころ、四年生の希望者に対し、一週一回一時間半宛、「花」「茶」を指導、「情操の陶冶を図り一面日本

婦人として貞静□□なる風格を養成する」ことを目的とした。<sup>(20)</sup>

(3) 群山公立高等女学校（一九二二年四月創立、全羅北道）

一九四二（昭和一七）年ころ一学年に梅・松の二組、四年制。一クラス六〇名中五〇名以上が日本人。通常他校よりは朝鮮人の割合が多かった。一週に一、二時間「花」「茶」を習った。学校の裏山に日本人老夫婦が花を栽培していて花をそこで買った。また家事の授業に「茶」や「花」の時間があつた。<sup>(21)</sup>

(4) 元山公立高等女学校（一九二二年四月創立、現、北朝鮮）

現在、昭和初期と思われる「花」「茶」「作法」（饗応）の写真が残されている。特に「花」の作品展示写真からは、生花<sup>せいしか</sup>様式さまざまな作品が出されており、放課後部活動として熱心に教えられたと思われる。作法室は床の間、違い棚、書院のある二間続きの広くりっぱな部屋であつたことが写真からわかる。<sup>(22)</sup>これらの内容は、元山の港の発展からくる同地日本人の裕福さを裏付けるものでもあろう。

以上のことから昭和初期、いづれの学校も、「花」「茶」を教えたことがわかる。しいて言えは日本女性らしさ（風格）を培うものであつたと捉えられよう。また、「作法」「花」「茶」が「家事」と結びつけられているのがわかる。

## 二 朝鮮人を対象とした公立の女学校・高等女学校

### 1 京畿公立高等女学校（現京畿女子高等学校、ソウル）

#### (1) 沿革

一九〇八（明治三二）年四月純宗勅命により官立漢城高等女学校設置、初代校長魚允迪。一九一一（明治四四）年八月、朝鮮教育令公布により官立京城女子高等普通学校に改称、三年制。一九一三（大正二）年四月、第二代校長太田秀雄就任、一九一九（大正八）年第三代校長長田富作就任。一九二二（大正一一）年第二次朝鮮教育令公布により「国語を常用セサル者ニ普通教育ヲ為ス学校」として京城公立女子高等普通学校と改称、四年制となる。一九二五（大正一四）年、第四代校長高本千鷹就任。一九三八（昭和二三）年四月、第三次朝鮮教育令による高等女学校の一本化として京畿公立高等女学校と改称。一九四一（昭和一六）年四月、第五代校長に朝鮮人朴寛洙・日本名琴川寛が就任。<sup>(23)</sup>生徒はすべて朝鮮人であり、朝鮮人女子が通う伝統校として知られた。

#### (2) 卒業アルバムから

同校の卒業アルバムは、一九二九（昭和四）―一九四一（昭和一六）年の間、一三冊が現存する（表1参照）。先にも述べたように卒業アルバムに掲載される写真はその学校の特記すべき教育内

表1 京畿公立高等女学校（京城公立女子高等普通学校）写真帖一覧

| No | 出版<br>年 | 和暦   | 期<br>生 | 在学年              | い<br>け<br>花 | 茶<br>の<br>湯 | 行事 / 特記事項  |
|----|---------|------|--------|------------------|-------------|-------------|--|
| 1  | 1929    | 昭和4  | 19     | 大正14.4-<br>昭和4.3 | ×           | ×           | 写真帖名は「わすれなぐさ」、校長と母校玄関建物（以下同様）、寄宿舎の白松と作法室の鉢前・理科実験と体操、家事裁縫、バレー・バスケット・卓球、韓服   |
| 2  | 1930    | 昭和5  | 20     | 【欠本】             | —           | —           | —（校服改定洋服へ・「内地」と同様）   |
| 3  | 1931    | 昭和6  | 21     | 昭和2.4-6.3        | ×           | ×           | 寄宿舎の白松と作法室の鉢前・洋服、裁縫・校服一斉手編、理科実験と学芸会、割烹会と雛祭（作法室内部）、「内地」修学旅行   |
| 4  | 1932    | 昭和7  | 22     | 昭和3.4-7.3        | ×           | ×           | 寄宿舎の白松と作法室の鉢前、理科実験と割烹、漬物実習、刺繍、卓球、秘苑・植物園、田植え・稲刈り、「内地」修学旅行   |
| 5  | 1933    | 昭和8  | 23     | 昭和4.4-8.3        | ×           | ×           | 寄宿舎の白松と作法室の鉢前、理科実験・刺繍、漬物実習、秘苑・植物園、雪の日の作法室（庭から室内）、「内地」修学旅行、謝恩会は韓服   |
| 6  | 1934    | 昭和9  | 24     | 昭和5.4-9.3        | ○*          | ×           | 雪の日の白松寮と作法室の庭、25周年生活改善展覧会・生徒のいけ花作品・体育大会・音楽会、「内地」修学旅行（李王殿下新御殿、以下、李王家）、漬物、田植え、雛祭りの集い（作法室）、矢島千萬先生、謝恩会韓服   |
| 7  | 1935    | 昭和10 | 25     | 昭和6.4-10.3       | ○           | ×           | 雪の日の白松寮と作法室の庭、25周年生徒のいけ花作品、「生花のお稽古」、部活動（テニス優勝・バスケット・バレー）、作法室庭にて集い、理化教室、割烹・刺繍、第三回スケート大会・昌慶苑、雛祭りの音楽会（ピアノ・合唱）、田植え・刈入れ、雛祭りの集い、「内地」修学旅行   |
| 8  | 1936    | 昭和11 | 26     | 昭和7.4-11.3       | ○           | ×           | 雪の日の白松寮と作法室の庭、刺繍・割烹、田植え・刈入れ・芋掘りなど、新講堂落成祝の音楽会（演奏・琴三味線なども）「生花のお稽古」、雛祭り、スケート・昌慶苑、「内地」修学旅行（李王家）、理科室、矢島先生（昭和7年5月11日新任式「作法」担当）   |
| 9  | 1937    | 昭和12 | 27     | 昭和8.4-12.3       | ×           | ○           | 雪の日の白松寮と作法室の庭、刺繍・裁縫、割烹・理科室、観能会（創立記念日）、テニス・伊勢神宮競技、「お茶のお稽古」（作法室・琴三面）・ピアノ、運動部、スケート・登山、田植え、雛祭り会（講堂・生徒琴演奏三面）、府内見学と田植え、「内地」修学旅行（李王家）、朝鮮神宮参拝（卒業式日の朝）、謝恩会韓服  |
| 10 | 1938    | 昭和13 | 28     | 昭和9.4-13.3       | ×           | ×           | 「皇国臣民ノ誓詞」（昭和12年10月6日愛国日初斉唱）、校舎と白松寮、割烹・理科室、編み物、裁縫、観能会（創立記念日）、雛祭り会（講堂・生徒琴演奏三面）、田植え・稲刈り（勤労体験）、スポーツ、昌慶苑スケート、皇軍献納の尽忠憤努志製作ほか、愛国子女団発団式（昭和12年12月18日）、南京陥落の快報、「内地」修学旅行（宮島・伊勢神宮・李王家）、昌慶苑の一日と朝鮮神宮参拝、謝恩会洋服 |
| 11 | 1939    | 昭和14 | 29     | 【欠本】             | —           | —           | —  |
| 12 | 1940    | 昭和15 | 30     | 昭和11.4-15.3      | ×           | ○           | 皇国臣民ノ誓詞、校舎と白松寮、奉安殿落成式、南京陥落の快報、愛国子女団発団式、出征勇士を送る、勤労報国作業、田植え・稲刈り、割烹会、校友会（技能部・茶の湯）、皇国臣民誓詞之柱、昌慶苑、「内地」修学旅行（檀原神宮建国奉仕隊作業・伊勢神宮・李王家）   |
| 13 | 1941    | 昭和16 | 31     | 昭和12.4-16.3      | ○           | ○           | 皇国臣民ノ誓詞、校舎と白松寮、奉安殿落成式、特設防護団、体育大会、勤労作業、割烹会、校友会、茶の湯・生花（盛花）、昌慶苑・秘苑、「内地」修学旅行（檀原神宮・伊勢神宮）、韓国人・日本人名   |

\* 展覧会作品写真のみ掲載される

生徒の活動の様子：○は写真の掲載あり、×は写真の掲載なし



容であり、その学校の教育内容として主張したい事柄が掲載されるものと考え、以下このような視点から卒業アルバムを見ていく。

まずアルバム巻頭は当初、校長と校舎、次に寄宿舎白松寮とその庭にある白松<sup>(34)</sup>、作法室(和室)外観と続く。巻頭に校長と校舎は学校アルバムの定番であるが、注目するのは寄宿舎に転用された李朝時代の大正の屋敷ならびに庭の白松が一貫して掲載されていることである。これは朝鮮の高貴な歴史ある学校であることを示すものである。いっぽうそれとともに掲載されている作法室(和室)外観の写真是、作法室庭の雪景色の写真に変わり、さらに一九三八(昭和一三)年からは「皇国臣民ノ誓詞」(一九三七年一〇月六日愛国日初斉唱)に変わった。

さらに留意すべきは、卒業謝恩会は一九三七(昭和一二)年三月までは韓服、それ以後制服(洋服)となったことである。和服は着用していない。また「内地」への修学旅行では毎回李王家を表敬訪問している。韓国の伝統的な食文化である漬物(キムチ)実習の様子も掲載されている。初代と第五代校長は朝鮮人であった。いっぽう一九三七年以降は戦争関連の記事写真が増えていることもわかる。

「作法」の写真は、御膳による食事のいただき方などの「作法」実技の様子は掲載されず、作法室を使用して割烹会や雛祭会が実施されたその記念としての集合写真が、見出せるのみである。また洋室の作法室があったというが、写真の掲載は見出せない。

「花」「茶」については、「花」の写真が見出せるのは一九三四

(昭和九)年発行のアルバムからで、卒業生たちの話もそれを裏付ける<sup>(35)</sup>。またそれは華道部を教えた同校教諭矢島千萬(学科目「作法」を担当<sup>(36)</sup>)の着任が、一九三三(昭和八)年五月であることと時を同じくしている。アルバムから華道部は矢島教諭自らが教え、茶道部は女性の先生(茶の湯師匠)を外部から招くとともに矢島教諭も教え、顧問をしていたと思われる。

一九三五(昭和一〇)年のアルバム以後、「花」か「茶」のどちらかが掲載されるようになる。しかし一九三八(昭和二三)年は、どちらも掲載されていない。それは創立記念の観能会、愛国



写真1 茶の湯

出典：『わすれなぐさ』(卒業写真帖・第31回)京畿公立高等女学校、1941(昭和16)年

子女団発団式など大きな催しがあったため関心がそちらに移ったためであろう。しかし一九四一(昭和一六)年は「花」「茶」両方が載せられ、「茶」の写真には、国民服の男性教諭や和服姿の女性教諭も一緒に写っている(写真1参照)。「茶」が戦時期日本人の精神修養と



写真2 いけ花

出典：『わすれなぐさ』（卒業写真帖・第26回）京城公立女子高等普通学校、1936（昭和11）年

捉えられたことを窺わせる。

一九四二（昭和一七）年以後、

戦時下により卒業アルバムは作られなかったという。

掲載写真ほか同校に残された写真からは、「花」は図書室など特別

教室で椅子と机で教えられ、「茶」は作法室（和室）で教えられたことがわかる。また「花」よりも「茶」が、戦時下修養として重要視された感がある。「花」は「生花」ではなく、「盛花」や「投入花」が教えられている（写真2参照）。

### (3) 聞き取り・アンケート調査から

一九三四（昭和九）年入学者複数からは、学校では日本人として、家に帰ると朝鮮人としての生活であり、完全な二重生活で日本に同化しなかったとの証言を得た。「花」「茶」は四年生のおきに放課後に週に一回くらい部活動のようにあった。習う生徒は一

学年三クラスで一五〇人いるなかで五、六人だけだった。オルガンが三年、「花」「茶」琴・ピアノが四年生だった。作法室は和室のほか洋室もあった。作法の時間は歩き方・すわり方を先生が示範、その後生徒がならった。

一九三六（昭和一一）年入学者からは、在学中自分は「花」「茶」ともに習っていない。しかし「花」は和室ではなく、「茶」は和室で行うことを知っていたことは、学校内でそれを見て知っていたであろうという。また別の者は、放課後および授業としてあったと記憶しているという。

一九四一（昭和一六）年入学者は、作法室は広い畳の部屋で障子・廊下があった。「作法」は一クラス五〇人が二列にならんで正座し、色々なことをした。「茶」は畳に正座、しぐさを見せてもらい袱紗捌きを習った。しかしおかしがっていた。関係のないこと、大げさな仕草、早く終わって欲しいと思っていた。「花」は形ばかり天地人三点などの理論を習った。

一九四二（昭和一七）年入学者は、授業があったのは二年生までだった。それまでは週に一時間「作法」「花」「茶」を含むを習った。三年からは勉強は午前中二時間のみあとは勤労奉仕となり、「作法」の時間はなくなった。

また、同年入学の現在アメリカ在住者の英語書簡によれば、週に一回「作法」を作法教室で習ったが、それは日本文化の導入による朝鮮の少女たちの日本への同化の進行を助けるものであり、「作法」に十分な興味はなく、抵抗心を持っていたという。しか

し戦後、自分が同校で、優れた日本人教師から「上等な日本語」を教えられていたことを知って驚いたという<sup>(45)</sup>。

概ね「作法」の思い出の多くは足がしびれて痛かった、窮屈だった、難しかったとあるが、ごく少数ながら習ってよかった(一九四二年入学)、とても厳かだった(一九四五年入学)という回答もある<sup>(46)</sup>。

ほかに薙刀、詩吟も教えられた。詩吟は一九四一(昭和一七)年から翌年まで、全校生徒六〇〇人が講堂に集められ詩吟の説明、発声方法などを習った後、乃木希典の漢詩「金州城」を全員で吟詠したという<sup>(48)</sup>。

以上のことから、同校では昭和初期、「作法」は週一時間教えられ、「花」「茶」は放課後の部活動のような形で希望者に教えられていた。また「作法」の時間には立ち居振る舞いのほか、「茶」は袱紗捌き程度、「花」はひととおりの説明をうけた。

同校において「作法」の時間に「花」「茶」が教えられたのは、「作法」を担当する矢島教諭が「花」「茶」に堪能な者であったことが関係したと考えられる。また放課後の部活動に「花」「茶」が設けられたことも、矢島教諭の着任と関係があると思われる。しかし一九四四(昭和一九)年度以降は戦時下勤労奉仕のためそれらは行われなくなり、わずかに煎茶の入れ方が教えられるのみであったという。

「花」「茶」「作法」ならびに作法室は、通常内地や植民地の日本人を対象とする高等女学校では、特筆すべき内容ではないため

卒業アルバムに掲載されない。しかし朝鮮人を対象とする同校では、日本人女性としてのアイデンティティを身につけていることを示すものとして載せられ、それは特に戦時期において顕著であったといえる。

しかし「作法」について、特に卒業アルバムを見る限りにおいて、当然厳しいしつけが行われたのであろうが、同校で重視されているとは言い難い。少なくともここからは植民地台湾の台湾人を主とした台北第三高等女学校や台南第二高等女学校にみられるような、「作法」イコール日本人という明確な関係性は見出せない。さらに台湾の両校の場合、「花」が主に教えられたが、朝鮮の同校の場合、「花」「茶」がほぼ同等に教えられ、さらに戦時下むしろ「茶」が修養として位置づけられたといえる。

## 2 釜山港公立高等女学校(現、慶南女子高等学校、釜山)

### (1) 沿革

一九二七(昭和二年)四月、釜山公立女子高等普通学校開校、四年制。一九二九(昭和四年)年、釜山府水晶町五五八番地に新校舎落成につき移転。一九三一(昭和六)年三月第一回卒業式、卒業生四二名であった。一九三八(昭和一三)年四月、第三次朝鮮教育令公布に伴い釜山港高等女学校と改称、生徒はすべて朝鮮人であった<sup>(49)</sup>。朝鮮人を対象とした公立の高等女学校としては、京畿公立高等女学校、平壤公立西門高等女学校に次ぐ設置であった。

## (2) 卒業アルバムから

現在、一九三二（昭和六）―一九四四（昭和一九）年の間、一一冊の卒業アルバムが残されている（表2参照）。一九三二年は開校年に一年生として入学した生徒が卒業した年である。先の京畿公立高等女学校と同様の観点から掲載写真を見ていく。

まず当初アルバム巻頭は校舎と校旗、校長をはじめとする教員一同の写真であったが、一九三九（昭和十四）年からは奉安殿・大麻殿が巻頭に来る。さらに一九四〇（昭和十五）年からは紀元二六〇〇年記念碑「八紘一字」がそれに加わった。

「作法」は一九三四（昭和九）年のアルバムに見出せる。当初作法室は、普通教室に畳のようなものを敷いて使用している。作法実技の様子が写されている。一九三九（昭和十四）年からは洋室と和室の作法室に変わったことから、このころ作法室がつくられたと思われるが、一九三七、一九三八（昭和一二、一三）年のアルバムが欠けているため詳細はわからない。洋室の作法室では紅茶をいただく写真が、和室の作法室では煎茶のもてなし方の様子が掲載されている。

「花」「茶」の写真は一九三一（昭和六）年のアルバムに見出せる。ここから「花」「茶」は開校間もなく設置され、教えられたと思われる。「花」「茶」の師匠である

表2 釜山港公立高等女学校（釜山公立女子高等普通学校）写真帖一覧

| No. | 出版年  | 和暦   | 期生 | 在学年         | い<br>け<br>花 | 茶<br>の<br>湯 | 行事 / 特記事項   |
|-----|------|------|----|-------------|-------------|-------------|---|
| 1   | 1931 | 昭和6  | 1  | 昭和2.4-6.3   | ○           | ○           | 「花道」「茶道」、雑祭り（講堂）、運動会、雪合戦・水泳ほか   |
| 2   | 1932 | 昭和7  | 2  | 昭和3.4-7.3   | ×           | ×           | 理化、数学、雑祭り（講堂）、刺繍、裁縫   |
| 3   | 1933 | 昭和8  | 3  | 【欠本】        | —           | —           | —   |
| 4   | 1934 | 昭和9  | 4  | 昭和5.4-9.3   | ○           | ○           | 「鎮海湾要塞司令部検閲済」以下同様、「作法」、家事、「花道」「茶道」は昭和6年と同じ写真  |
| 5   | 1935 | 昭和10 | 5  | 昭和6.4-10.3  | ×           | ×           | いけ花・茶の湯の写真なし  |
| 6   | 1936 | 昭和11 | 6  | 昭和7.4-11.3  | ○           | ×           | いけ花の写真「生花のお稽古」、修身・物理実習・西洋史・音楽   |
| 7   | 1937 | 昭和12 | 7  | 【欠本】        | —           | —           | —   |
| 8   | 1938 | 昭和13 | 8  | 【欠本】        | —           | —           | —   |
| 9   | 1939 | 昭和14 | 9  | 昭和10.4-14.3 | ×           | ×           | 奉安殿・大麻殿の写真が巻頭、以後同様、教師軍服、寄宿舎、作法教室初出（「その一」洋室で紅茶・「その二」和室で煎茶）、菊花栽培、部活動（テニス・卓球・競技・バスケットほか）、「内地」修学旅行（李王家）、慰問袋、勤労報国隊 |
| 10  | 1940 | 昭和15 | 10 | 昭和11.4-15.3 | ×           | ×           | 名簿・ほとんどが韓国名、紀元2600年記念碑「八紘一字」が以後巻頭写真に加わる、寄宿舎漬物など、作法教室・和・洋、「内地」修学旅行（檀原神宮建国奉仕隊作業・明治神宮）                           |
| 11  | 1941 | 昭和16 | 11 | 昭和12.4-16.3 | ×           | ×           | 日本名が多くなる、勤労奉仕作業、珠算、女子青年団結成式、部活（テニス・卓球・水泳・バスケ・バレー・陸上競技）、「内地」旅行、遠足  |
| 12  | 1942 | 昭和17 | 12 | 昭和13.4-17.3 | ×           | ×           | ほぼ日本名、紀元2602年明記される、薙刀、「勤労報国隊」（稲刈り・土運びなど）、菊花栽培、「内地」修学旅行、和室作法室  |
| 13  | 1943 | 昭和18 | 13 | 昭和14.4-18.3 | ×           | ×           | 日本名になる  |
| 14  | 1944 | 昭和19 | 14 | 昭和15.4-19.3 | ×           | ×           | 行軍、モンペ、真鍮器献納式（お蔵い）、神棚遣拝   |

生徒の活動の様子：○は写真の掲載あり、×は写真の掲載なし

初老の女性も写っている。しかし翌一九三二年のアルバムには「花」「茶」は掲載されず、裁縫・ミシンや刺繍の写真が掲載された。一九三四（昭和九）年のアルバムには掲載されるものの、一九三一年の「花」「茶」の写真と全く同じものが掲載されていることから、再使用したと言わざるを得ない。しかしその翌年（一九三五）は再び「花」「茶」ともに掲載されていない。

一九三六（昭和一一）年、「生花のお稽古」のタイトルで「花」が掲載された。この写真から、椅子と机で、老年の男性のいけ花師匠により教えられ、国民服の男性教諭も一緒に写っている。「花」は「生花」で、寸胴（筒型花器）に葉蘭、菊などが入れられている。しかし以後のアルバムからは「花」「茶」ともに見出せず、「作法」の饗応の写真が掲載されるほか、勤労奉仕の写真が掲載されるようになった。

同じく朝鮮人対象の高等女学校であった京畿公立高等女学校とは異なる掲載内容である。「花」「茶」「作法」はもとより、アルバムの巻頭をはじめ多くの点で異なる。

### (3) 『会誌』、聞き取り・アンケートから

現在、一九三一（昭和六）—一九三四（昭和九）年まで計四冊の『会誌』が存在するが、いずれにも「花」「茶」に関する記事は見出せない。校友会の活動（部活動）は図書、園芸、競技、庭球、卓球、排球、籠球、水泳、購買部であり、「花」「茶」は校友会活動としては行われていない。

一九三六（昭和一一）年入学者は、入試の面接で時計をみるこ  
とができるかを問われたことが印象に残っているという。高等女  
学校に進むことは当時としては珍しいことで、父親（大邱農林出  
身）に感謝しているという。

「作法」は、正座や襖の開け閉めをしたことを覚えている。普  
通教室に畳を敷いた作法室があったことも覚えている。四年のと  
き洋食のマナーを習った。「花」「茶」は習わなかった。菊の園芸  
をやった。後年、朴正熙大統領のころになり日本のいけ花を習っ  
た。また四年生の時の一五日間の内地への修学旅行では、一クラ  
ス五五名中五、六名行けない人がいた。檜原神宮で一日奉仕、桃  
山御陵参拝、強羅温泉へ行ったことを覚えている。

一九三九（昭和一四）年入学者は、父が判任官で官舎がある  
「日本人が住む村」で育った。石鹸の匂いがしたことを覚えてい  
る。誕生日には日本の風習である赤飯を食べた。学校ではテニス、  
バレーボール、薙刀をやった。一クラス五五名で梅・桜の二クラ  
スがあった。卒業後は梨花の女専に進学した。

「作法」の時間は正座が慣れていなくて難しかった。立ちあが  
れず倒れて大騒ぎになったという。「花」「茶」は習わなかった。  
この聞き取りからは、日本人官舎で育ちながらも正座の生活をし  
ておらず、「花」「茶」にも興味を持たなかったことがわかる。そ  
こには朝鮮人としての暮らしがあったのであろう。

以上のことから同校では、「作法」はもとより、「花」「茶」が  
開校まもなくから、課外に希望者のみに教えられていたと思われ

る。作法室も、一九三九（昭和一四）年には、床の間違い棚がある和室と、洋室もつくられていた。

### 3 平壤公立西門高等女学校（現北朝鮮）

#### (1) 沿革

一九一四（大正三）年四月、平壤女子高等普通学校三年制として創立。一九二二（大正一一）年四年制になる。一九二五（大正一四）年三月、平壤公立女子高等普通学校と改称。一九三八（昭和一三）年八月、平壤公立西門高等女学校と改称<sup>(33)</sup>。西門とは、西門通りにあつたためという。生徒はすべて朝鮮人であつた。

#### (2) 聞き取り・卒業アルバムから

一九三六（昭和一一）年入学者複数から、一クラスは五五名で、三クラスあつた。「作法」のほか、「花」は三階にあつた畳の作法室であつた。三年と四年の二年間、午後の授業として週一回池坊を習った。筒型の花器に「真・副・体<sup>しん・そふ・たい</sup>」と菊などを入れた。先生は女性だった。「茶」は習わなかった。校舎は一九三四（昭和九）年の火災で、コンクリート三階建て地下一階に建て替えられたものだった。地下に割烹室<sup>(34)</sup>があつたという。

一九四〇（昭和一五）年三月の卒業アルバムには「花」の写真が掲載されている。その写真から先生は女性、生徒は正座して「生花<sup>せいけ</sup>」用の筒型花器である「寸胴<sup>すんどう</sup>」に菊を入れている。教室は和室の作法室ではなく、普通教室に畳を敷いたものであり、生徒

は正座している<sup>(35)</sup>。

また、一九三六（昭和一一）年入学者の一人はソフトテニスの選手で、大会で優勝した。英語は二年まで。制服は冬はニット、夏はブラウスとジャンパースカートだった。卒業後は東京の実践女学校専門部に進学、卒業後帰国、母校に一九四五年一月から勤め担任をしたが、毎日兵器廠で大砲の弾磨きをした。この時の生徒引率には朝鮮人として、辛く悲しい思い出も多い<sup>(36)</sup>。

同校では昭和初期、「作法」はもとより「花」が授業として教えられていた。

### 4 慶北公立高等女学校

#### (1) 沿革

大邱公立女子高等普通学校として一九二六（大正一五）年創立、生徒はすべて朝鮮人であつた。一九三八（昭和一三）年、慶北公立高等女学校と改称。

#### (2) 性格教育として

『文教の朝鮮』昭和二年四月号に掲載された、大邱公立女子高等普通学校「本校の性格教育」から、「訓練週案作製」のための「性格陶冶項目」として「長上尊重」「温良貞淑」「相互尊敬」「規律秩序」に「作法」、「家庭和楽」「温良貞淑」「明朗快活」に音楽・手芸・図画・習字・詩歌とともに「花」の特別指導が挙げられている。特に「家庭和楽」は、「部屋を手芸品・書画・草花等で

装飾する」とあるのが見出せる。「茶」についての記載は見出せない。ここから同校で「花」が教えられていたことが推察される。<sup>(57)</sup>

### 三 朝鮮人を対象とした私立の女学校・高等女学校

#### 1 東萊高等女学校（現、東萊女子高等学校、釜山、キリスト教主義）

##### (1) 沿革

一八九五（明治二八）年一〇月一五日、オーストラリア長老教宣教会女子伝道部が釜山鎮の一家屋に日新学校という三年制の小学科を設置したことに始まる。<sup>(58)</sup>さらに一九〇九（明治四二）年八月、三年制の高等科（中等教育）を設置。一九一五（大正四）年小学科・高等科ともに四年制とする。一九二五（大正一四）年六月、高等科を現在地である福泉洞に移転、寄宿舎設置、東萊日新女学校と改称。一九三三（昭和八）年、専門学校入学者検定規定による指定認可を受ける。<sup>(59)</sup>生徒数は一学年四〇名程度であった。一九四〇（昭和一五）年東萊高等女学校と改称。生徒はすべて朝鮮人であった。<sup>(60)</sup>

釜山ではほかにもキリスト教宣教師による女学校が設立されたが、数年にして閉鎖したという。

一九三二―三七（昭和七―一二）年度の学科目は、修身（作法を含む）・公民科・聖書・国語・朝鮮語・英語・地理歴史・数学・

理科・図画・家事・裁縫・音楽・体操・手芸・教育・実業（農業一般）であった。<sup>(61)</sup>この時期はまだ高等女学校に改組していないが、ほぼ高等女学校に準じた学科目になっている。キリスト教主義の学校であったため「聖書」が学科目としてあり、また朝鮮語が教えられている。しかし「花」「茶」に関する記述は見当たらない。

##### (2) 聞き取り・アンケート調査から

一九三六（昭和一一）年一四歳で入学した者によれば、日本の「作法」も西洋式マナーも習った記憶はないという。英語は二年生から、朝鮮語は三年（一九三八年）からなくされた。ミッシェンの学校だったので毎日授業の間に講堂に集まり礼拝、讃美歌、聖書を読むことやその講義があった。先輩たちは抗日運動をしたが、日本の監視が厳しくなりあまりできなかった。日本語の使用は何かと些細な干渉が多かった。また寄宿舎は学校の隣にあった。畳の部屋はなく、板張りの西洋式で一部屋三人でベットが三つ、棚もあった。

また「花」は美術の女性の先生が放課後に習いたい人だけに教えていた。自分は習わなかった。「茶」や琴はなかった。四年生のとき薙刀ではなく剣道を習い、木剣で構えなどをした思い出があるという。<sup>(62)</sup>

一九四〇（昭和一五）年に入学した者も、「作法」の時間はなく作法室もなかったと答えている。その理由として抗日的学校であったことを挙げている。しかし本人は習っていないが「花」が

教えられ、それが女性の教師であったことを覚えていた。当時の思い出は日本語の強要と創氏改名であるという。<sup>(64)</sup>

しかし先に記したように、学科目「修身」には「作法」も記され、一九三三（昭和八）年には専門学校入学者検定規定による指定認可を受け、一九四〇（昭和一五）年からは高等女学校に改組改称していることから、認可のための視察もあったはずであり、何らかの授業が行われていなくては通常認可は下りないため、関連授業が行われていたと思われる。

### (3) 卒業アルバム・校友会誌から

一九三二（昭和七）年の卒業アルバムは調理・刺繍・ミシン実習やダンス・陸上・テニス・バスケットボール・ピンポンほか旅行（遠足）、読書、化学実験の写真が載せられている。<sup>(65)</sup> また一九四四（昭和一九）年の卒業アルバムは防空訓練、看護訓練、勤労奉仕（農作業）、教練、内地（東京・京都・奈良）への修学旅行、水泳、キムチ実習・試食会などが載せられている。<sup>(66)</sup> いずれも当時の女学校において重視された世相を反映した内容といえる。同校に残されたそのほかの写真（帖）からも、「花」「茶」「作法」に関する写真は見当たらない。<sup>(67)</sup>

同じくキリスト教主義の培花女学校（京城、現ソウル）の一九三一（昭和六）年第五回、一九三五（昭和一〇）年第九回の『卒業記念写真帖』においても、「花」「茶」「作法」の写真是掲載されていない。<sup>(68)</sup>

いっぽう校友会誌『日新』七、九、一〇号から、公的な教務内容は日本語であるが、学校内の行事等はかなりハングルを使用していることがわかる。また先の培花女学校の二冊の『卒業記念写真帖』も同様にハングルを使用している。日本語強要に関して、一九三八（昭和一三）年以前は緩やかさがあったことが思われる。ここで「内地」のキリスト教主義女学校の「花」「茶」「作法」の受容を確認すると、各種認可のためや戦時下、キリスト教主義教育継続との引き換えにこれらを取り入れている。これに対し、同校は日本の植民地といえども朝鮮の地にあり、校長はオーストラリア人、日本語や習字・「花」を教えた教員二名を除いて教員は朝鮮人であり、朝鮮人の「修身」担当教員はあるが、「作法」担当者は見当たらず、同じく、各種認可や戦時下、キリスト教主義教育継続という問題を抱えながら、どのようであったかは未知数の部分が大きい。

しかし、反日感情を抱いていた生徒の思い出に、日本人教員が放課後教えた「花」が残っていることは、日本の伝統的文化にわずかながらも心ひかれる部分があったと思われる。

## 2 進明高等女学校（現、進明女子高等学校、ソウル）

### (1) 沿革

一九〇六（明治三九）年四月、私立進明女学校として、朝鮮李王家高宗皇帝側室の嚴妃が弟嚴俊源を校長にして開校した。朝鮮人のみで創設され、教員も朝鮮人が多かった。李王家が創設した



学校としてその教育方針に賛同した上流家庭の女子が多く集まったといい、開校当初の卒業生に女官も見出せる。一九二一（明治四四）年私立進明女子高等普通学校、一九二二（大正一一）年四年制とする。一九三八（昭和二三）年四月、私立進明高等女学校と改組改称。生徒はすべて朝鮮人であった。開校時から一九二八（昭和三）年までは、普通学校（小学校）を併設していた。<sup>(20)</sup>

朝鮮教育令により教科課程は一九二二（明治四五）年、一九二二（大正一一）年、一九三八年（昭和二三）、一九四三（昭和一八）年と変遷がある。一九三八年からの学科目は、修身・公民・教育・国語・歴史・地理・外国語・数学・理科・実業・図画・家事・裁縫・音楽・体操・手芸で、外国語と手芸が選択であった。注目するのはそれ以前、「修身」は毎週授業時数が一時間であったのに対し、この年からは二時間になっていることである。これは一時間が修身、もう一時間で「作法」が行われたことが考えられる。また「花」「茶」に関する記述はない。<sup>(21)</sup>

## (2) 聞き取り調査・学校史から

一九四〇（昭和一五）年代、進明には礼儀作法のような先生はおらず、別のカリキュラムとして課外活動として習った。礼儀作法は日本の着物を着た先生が来て教えた。茶道も日本の先生が来て教えた。礼儀作法を教える部屋があったという。<sup>(22)</sup>

『進明七十五年史』によれば、同校に英親王両陛下（英親王と方子妃<sup>(23)</sup>）の三度の来校があった。生徒の学習成果の披露に着目し

て見ていくと、一度目は一九二二（大正一一）年五月四日、盛大で厳粛な歓迎会を催したとのみある。二度目は一九三八（昭和二三）年四月二三日、特別室に案内して学校の概況を報告、校内で歓迎会を催した。食後に四年松組の教練、三年生のマズルカを披露、四年竹組は家事の実習でお菓子を作った。約一時間の教育活動参観であった。三度目は一九四三（昭和一八）年七月一日、三年竹組が教室に設えた貴賓室に案内し、学校の概況などを報告後、歓迎会を催し、生徒代表四年の歓迎の詩の朗読、全校生徒の校歌斉唱、食後は茶室での四年生の茶道や生徒作品展示室を参観したという。<sup>(24)</sup> この三度目の来校の一九四三年七月に、四年生の茶道の参観があったことは、戦時下日本人としての嗜みもち学校生活を送っていることの、学校側のアピールとしてのものであったと考えられる。

また、一九三五（昭和一〇）年の卒業アルバムには「花」の写真が掲載され、以後一九三八（昭和二三）年、一九四三（昭和一八）年、一九四四（昭和一九）年発行の卒業アルバムに「花」の写真が掲載されている。

同校では外部から日本人の「作法」「茶」「花」を教える講師を迎え、作法室で「作法」「茶」、また「花」も教えられていたといえよう。

### 3 淑明高等女学校（現、淑明女子高等学校、ソウル）

#### (1) 沿革

一九〇六（明治三九）年五月私立明新女学校開校、同校は朝鮮李王家高宗皇帝側室の嚴妃と日本人キリスト者淵沢能恵<sup>(76)</sup>により両班の子女をはじめとする朝鮮人女子のために設立された。初代校長は朝鮮人女性李貞淑、朝鮮教育史上初の朝鮮人女性校長であった。淵沢能恵は学監兼主任教師として教育に尽力した。

一九〇九（明治四二）年私立明新高等女学校、一九一〇（明治四三）年私立淑明高等女学校、一九一一（明治四四）年私立淑明女子高等普通学校、一九三八（昭和一三）年四月淑明高等女学校と改称。一九三九（昭和一四）年四月、淑明女子専門学校を創立。生徒はすべて朝鮮人であった。

また、一九〇六（明治三九）年開校当時、同校は貴族女学校ともいわれた。それは両班出身、地域的にはソウル出身の良家名門子女を主に入学させたためであった。しかし一部ではかなり教育熱があつたにもかかわらず、両班階級では、女性に新教育を与えることに強い反対があつたため、学寮に入れ、学費経費なしにして生徒募集をした。また景福宮、徳寿宮の宮女一二人も入学した。一九一一（明治四四）年ころからは、時代の機運によって一般教育機関として門戸を開放するようになった<sup>(76)</sup>。

#### (2) 淵沢能恵の存在と学校記録から

まず、淵沢能恵自らは、一八八二（明治一五）年四月から一八八五（明治一八）年六月中途退学するまで同志社女学校に学んでいる。当時同校では、新島八重により「作法」（諸礼）が教えられている。またキリスト教主義の女学校であつたが日本のしつけ教育が行われていた。しかし「花」「茶」については、同氏退学後の一八九二（明治二五）年九月以降に教えられている<sup>(77)</sup>。さらに同氏に関する記録に「花」「茶」については見出せないことと考え合わせ、淵沢の在職中（開校時から昭和初頭）に、「花」「茶」が教えられていたかは判然としない。ただ彼女は晩年、庭の菊を手折って花瓶に挿すことなどはしていたという。また一九四一（昭和一六）年五月に出された「淑明学園女学校創設三十五年・財団創立三十年記念絵葉書<sup>(78)</sup>」は、和室を二部屋載せている。絵葉書向かつて左は、淵沢の自宅（師恩館として一九二八年に建築二階である<sup>(79)</sup>。もう一方の絵葉書向かつて右が、学校で使用された作法室と思われる。

学校記録からは、「教職員在職表」に、一九〇八（明治四一）—一九一八（大正七）年まで長谷川夏子、礼法・舎監とあることから、「作法」が教えられていたことがわかる。和歌、俳句も教えられた。また、一九二七年頃から三〇年代にかけて作法、裁縫を日本式ではなく朝鮮のものを、という生徒たちの要求が強まった。それほど日本人化本位の教育が行われていたという<sup>(80)</sup>。

また、一九三八年以降、木剣・弓道・薙刀など武術も校庭で教

えられた。<sup>(83)</sup>

### (3) アンケートから

一九三八（昭和一三）年に入学した者は、作法室があったと答えている。一九四一（昭和一六）年に入学した者は、作法の時間があり「茶」も習った、先生は女性であったと答えている。また一九四二（昭和一七）年入学の者は学校で「花」「茶」を習い、先生は女性であったと答えている。<sup>(84)</sup>

以上のことから、開校もない一九〇八年から「作法」（礼法）が教えられ、日本人としての教育が厳しく行われた。昭和初期には絵葉書にみるように大きな床や違い棚がある、広くりつばな作法室があり、聞き取りから課外に「花」「茶」も教えられたことがわかる。

### 4 梨花高等女学校（現、梨花女子高等学校、ソウル、キリスト教主義）

#### (1) 沿革

一八八五年、医師スクレントンと同母が来韓、宗派は北監理教（メソジスト監督教会）。一八八六（明治一九）年、校名を洋国館として一人の生徒から授業を開始した。<sup>(85)</sup>一八八七（明治二〇）年、高宗皇帝から梨花学堂の校名を下賜される。

一九〇四（明治三七）年、四年制中学科設置、一九〇八（明治四二）年同科第一回卒業式。一九一〇（明治四三）年、大学科四

年制設置。

一九一八（大正七）年、梨花学堂から梨花女子高等普通学校と梨花女子普通学校（小学校）に分離・改称・開校。一九二二（大正一一）年、第二次朝鮮教育令により、女子高等普通学校三年制を四年制に、普通学校四年制を六年制にそれぞれ変更した。梨花学堂大学科は、一九二五（大正一四）年私立専門学校令により、梨花女子専門学校四年制に改称した。一九二八（昭和三）年二月朝鮮総督府告示第五五号により梨花女子専門学校の卒業者は、私立女子高等普通学校の教員資格を指定された。一九三二（昭和七）年、普通学校廃止、中等教育のみの機関となった。一九三八（昭和一三）年梨花高等女学校四年制に改称。一九四六年、六年制の中学校に改編される。<sup>(86)</sup>

#### (2) 教科課程

一九〇八（明治四二）年の中学科教科課程は、宗教（聖書）・漢文・修身・地誌・歴史・算術・英語・生理・衛生・動物学・植物学・図画・理科・簿記・代数・初歩体操であった。<sup>(87)</sup>一九三八（昭和二三）年からは、「宗教（聖書）」は学科目から外されている。また体育科内容の改正により、撃剣、柔道基本動作、弓道、薙刀が教えられることになった。<sup>(88)</sup>教科課程内容に変遷はあるものの、「作法」「花」「茶」は学校史のなかには見出せない。<sup>(87)</sup>聞き取りからも、卒業生の記憶には残されていない。<sup>(88)</sup>

同校はほとんどが朝鮮人教師で、少数のアメリカ人教師（英

語・音楽・聖經)、さらにその半数の日本人教師であり、日本人教師は多くが日本語を教えていた。珍しいのは吉木という女性が「舞踊」を、一九四〇―一九四五年迄教えていることである。<sup>(88)</sup>日本舞踊であろうか。植民地台湾の台北第三高等女学校では、「体操」として日本舞踊が教えられていた。<sup>(89)</sup>しかし「作法」や「花」「茶」の教員は見出せない。一九三五(昭和一〇)年(二七回生)、一九三八(昭和二三)年(二〇回生)の卒業アルバムからも、「作法」「花」「茶」の写真は見出せない。また制服は韓服を着ているセーラー服になったのは一九三九(昭和一四)年からであった。<sup>(90)</sup>しかし、梨花女子専門学校の「茶」の写真が残されていること<sup>(91)</sup>から、取り入れなかったとは言い切れないと考える。

## 5 向上女子実業学校(現、東明女子高等学校) ほか

### (1) 沿革

浄土真宗大谷派が一九二二(大正一一)年八月、京城西大門に向上会館を開設したことともない一九二四(大正一三)年四月、向上女子技芸学校設立、専ら朝鮮女子の教養につとめる。午前二時間は中等教育程度の学科として修身・国語・英語・朝鮮語・算術・珠算・家事・音楽、以後の時間は子供服・婦人服等の洋裁縫いが教えられた。一九三六(昭和一一)年三月、向上女子実業学校設立認可。生徒はすべて朝鮮人であった。

この向上会館の使命としては次のように述べられている。

たゞ朝鮮同胞の精神文化を開拓し、物質的生活を向上せしむ

るといふ外には何等の使命をも又目的をも持って居らない。同校は当初より朝鮮人のためにつくられた女学校であった。<sup>(92)</sup>

一九三八(昭和一三)年一月には同校卒業生が内地見学旅行の途次に東本願寺の参詣をし、手製の刺繍屏風をお裏方に献上している。<sup>(93)</sup>

一九四五(昭和二〇)年二月、東明女子商業学校と改称。一九四六(昭和二二)年九月、東明女子中学校六年制認可。

### (2) 聞き取り・アンケート調査から

一九四一(昭和一六)年四月入学者からの聞き取りによれば、東本願寺による学校で、参拝は朝鮮神宮と東本願寺にしていた。赤レンガの建物であった。三年制でクラス四〇―五〇名、朝鮮人のみ、松竹梅の三クラスであった。講堂の横のところに神棚があった。校長は油谷菊次郎先生、学校に作法室はなく、「作法」は校長宅の広い畳の部屋で校長夫人から習い、お茶(煎茶)の入れ方などであった。校長夫人はいけ花も教えていたという。<sup>(94)</sup>

ここから、条件が整わない中で、日本人としての「作法」、「花」、ひいては日本人の生活が教えられたことがわかる。

### (3) 京城女子商業学校・漢洞<sup>ひだん</sup>小学校

京城女子商業学校(私立)に一九四二(昭和一七)年四月に入學した者によれば、同校は朝鮮人による朝鮮人の学校で作法室がなく、「作法」の時間もなかったという。しかし彼女が卒業し

た漢洞公立国民学校（小学校、すべて朝鮮人<sup>96</sup>）には作法室があり、それは教務室の横にあり一〇畳くらい<sup>97</sup>の広さで床の間・違い棚・神棚があり、いけ花も置かれていた。小学校高学年のとき、雨天の時や梅雨期の或る時期にわずかの時間を利用して、作法室で作法について教えられた。その時、行事の花材について、

- ①新年 松、竹、梅、万年青、福寿草
- ②紀元節 彼岸桜、梅、竹
- ③神武天皇祭 桜、桃
- ④明治節 菊類
- ⑤天長節 牡丹、芍薬
- ⑥出産祝 松、竹、南天、月桂樹
- ⑦婚礼 松、竹、梅、常磐木
- ⑧五月節句 菖蒲、花菖蒲、あやめ、よもぎ
- ⑨七夕 秋の七草、萩、桔梗、女郎花、藤袴、なでしこ、葛ま  
たは蓮花
- ⑩重陽 黄菊、白菊、赤菊、萩

と習ったことを、今なお記憶している<sup>97</sup>。

このような記憶からは、当時の朝鮮人小学生の純真さ、優秀さが思われる。また、朝鮮人の経営による私立女学校は、日本人女性としての日常生活習得にまで及ばなかったことがわかる。

#### 四 「内鮮」共学の高等女学校

##### 1 京城舞鶴公立高等女学校（現、舞鶴女子高等学校、ソウル）

##### (1) 沿革

一九四〇（昭和一五）年四月開校、四年制。当初一年間は鍾路小学校を仮校舎とし、二年目から新校舎に移ったが、校庭などはまだ工事中であった。この学校の特徴として日本人と朝鮮人各一名をペアにし、学校生活はもちろん放課後も一緒に勉強し、遊ぶ「学友制度」というものがつくられ日本人・朝鮮人生徒数は同数であった。学校へは日本人と交際のある家庭の人が来ていたという。終戦により、高等女学校入学者としては六期生を出すに終わった。戦後は舞鶴女子高等学校として継承されている<sup>98</sup>。

##### (2) 聞き取り・アンケート調査・写真から

##### 〈学友制度〉

一期生・日本人多数によれば、「学友制度」は、学校で決められた日本人と朝鮮人各一名がいつも一緒にいるものであった。お互いの家庭への訪問が熱心に勧められ、卒業するまで互いの家に行っていた。朝鮮人学友宅では白菜キムチをつけるのを見たり食べたり、もらって帰ったこともあったという。朝鮮神宮参拝も学校からの参拝とは別に、順番にこのペアでも行った。帰ってきて

から校長室の神棚に最敬礼した。<sup>(99)</sup>

この学友にはさらに「姉妹学友」というものもあり、それは一期生ペアと二期生ペアが一组になって活動するもので、学校からペアごとに割り当てられた学校敷地内の「一坪農園」と名付けられた場所で一緒に作業したという。三期生ができると、三期生ペアもその「姉妹学友」に加えられた。ここではナス・キュウリ・エンドウ豆・さつま芋などの野菜を作った。<sup>(100)</sup>

#### 〈宿泊学習〉

「学友制度」の一環として、二年目から校長宅での「宿泊学習」が行われるようになった。成績順ではなく、クラス・名簿順であった。この学習は朝鮮人生徒の日本人としての日常生活の修得のため行われた。二つのペアが一组になり、土曜日学校が終わるとまず朝鮮人二人が学校敷地内にあった校長宅へ宿泊に行き、校長夫人や同校女性教諭に掃除、食事、風呂の入り方をはじめ日本人の生活のさまざまなことを実際に習い、翌日曜日に、日本人二人が校長宅を訪問し、朝鮮人二人が習った昼食を校長・校長夫人と生徒四人でいただき、時間を過ごすというものであった。<sup>(101)</sup>

二期生の朝鮮人は、自分の父親は医者、日本人学友の父親は総督府の役人だった。毎年最も優秀な学友ペアに学友賞が贈られており、毎年もらっていた。学校でも、家に帰ってからお互いの家に遊びに行つて一緒だった。しかし校長宅に一泊して作法を習うことは、順番が来ずできなかったという。<sup>(102)</sup>



写真3 茶道の時間

京城舞鶴公立高等女学校、1941年頃（ソウル、舞鶴女子高等学校歴史館蔵）

〈「花」「茶」

「作法」〉

二階建て校舎の角に、普通教室に畳を敷いた部屋があった。「作法」や裁縫もそこで行つた。現在、生徒四〇名ほどが集まり、中央に「茶」の先生と思われる和服の女性が生徒性が正座し、生徒

一〇人ほどが茶道具の前に正座し、御点前を行う写真が残されている。一クラス分の生徒数であることから、授業の一環として行われたものと思われる（写真3参照）。

一期生の日本人は、「置き柄杓」「切り柄杓」などの言葉は今なお覚えているという。袱紗捌きも習った。お菓子は自分たちで作り、きなこを団子にして爪楊枝に挿す州浜だった。また、「花」も行われたが何人かが実際にするだけで、ただ見ている時のほうが多かったという。<sup>(103)</sup>

また二期生の日本人は、校長夫人に習って花をいけた覚えがある。また、「花」「茶」は部活動として放課後にあった。「茶」は

作法室、「花」は古流、「しん・そえ・たい」だった。普通教室で習った。「作法」は家事の時間に習った。<sup>(18)</sup>

しかし一九四二（昭和一七）年度からは勤労奉仕のため、一日一時間のみの授業となり、「作法」や「茶」「花」もそれまでの期間でのことであつた。そのほか「作法」の時間よりも、板の間の講堂での朝令の正座が辛かつたという思い出がよく聞かれた。<sup>(19)</sup>また同校歴史館に残された写真や同窓生たちの思い出話からは、掃除の仕方を厳しくしつけられたという話や、校庭での薙刀の写真も残されている。<sup>(20)</sup>

以上のことから、同校では「作法」はもとより、「花」「茶」が放課後の希望者のみの活動のほか、授業の一環としても行われたことがわかる。朝鮮人の日本人への同化に、「花」「茶」が用いられたと言える。また朝鮮人生徒に日本人としての生活を教えるため、校長宅での宿泊学習をはじめとして様々な努力がなされたことがわかる。宿泊学習は、台湾においても行われることがあつた。<sup>(21)</sup>

## おわりに

「花」「茶」「作法」の取り入れについて、先ず日本人を対象とする学校について考えると、台湾における場合と同様、「花」「茶」の在り方に取り立てて内地との相違はない。内地の学校においても取り入れに積極的な学校とそうではない学校がある。釜山公立高等女学校は前者であり、京城第一公立高等女学校は後

者であつた。しいて言えば朝鮮の学校において「花」「茶」はむしろ積極的に教えられ、卒業アルバムにも掲載されることがあり、そこには「外地」ゆえに、日本の女性らしい風格を培うために取り入れるということがあつたと思われる。いっぽう「作法」については、朝鮮では、「家事」の一部という捉え方をされることが多い。台湾における場合のように「作法」という存在そのものに日本人のアイデンティティを見、一軒家もしくはそれに準じた作法室を作ることでもなかつた。<sup>(22)</sup>

次に、朝鮮人を対象とする学校について、伝統校である京畿公立高等女学校の場合、自校を朝鮮の高貴な歴史ある学校と位置づけ、卒業謝恩会は韓服、後に制服（洋服）で和服を用いることはなかつた。伝統的な食文化であるキムチ漬物実習（他校でも）も行われた。それは台湾の高等女学校が和服着用で作法を教えられたり、卒業式・謝恩会に和服着用を義務付けられ、裁縫の時間にそれを制作したことは異なる。

さらに釜山港公立高等女学校や平壤公立西門高等女学校を含め、学校では日本人、家では朝鮮人という二重生活であつたことや、日本人女性としてのアイデンティティを身につけていることを示すものとして、卒業アルバムに「花」「茶」の写真が載せられたことは朝鮮・台湾ともに同じである。しかし「作法」については、台湾ほどに朝鮮は重きを置かれていない。また朝鮮の場合、「花」「茶」は同程度に教えられたが、台湾の場合、「花」が圧倒的に多いという違いがある。

朝鮮人を対象とした私立の学校で、東萊高等女学校・梨花高等女学校というキリスト教主義の学校の場合、「作法」「花」「茶」については未知数の部分も多い。しかし特に戦時期、何らかの方法で教えられたことが思われる。「内地」のキリスト教主義の学校の取り入れとは違った対応であることもわかる。

いっぽう進明高等女学校・淑明高等女学校という朝鮮李王家ゆかりの学校については、「作法」や「花」「茶」が教えられ、進明では英親王兩陛下のもてなしに「茶」が行われ、淑明では記念絵葉書に作法室が掲載された。また浄土真宗大谷派（東本願寺）が開設した向上女子実業学校は、条件が整わない中で朝鮮人生徒に、「作法」「花」「茶」を通して日本人の生活を垣間見させたといえよう。しかし京城女子商業学校は朝鮮人経営の朝鮮人の学校で、「作法」「花」「茶」は教えられることがなかった。実際朝鮮人の多くがそうであった。しかし小学校で「作法」を学ぶこともあった。「内鮮」共学校では、同化の取り組みが教育の中心となるなかで、「作法」はもとより、「花」「茶」は放課後の部活動的なものだけでなく、授業の一環としても行われた。

以上のことから、高等女学校における位置づけとして「作法」は厳しく、「花」「茶」はほんの一通りを習うというのが本来のあり方であった。しかし植民地朝鮮において、朝鮮人を対象とした高等女学校や「内鮮」共学であった高等女学校では、特に「花」「茶」は、日本人女性としてのアイデンティティを身につけていることを示すものとして、取り入れている。それは台湾の台湾人

を主とした高等女学校においても同様である。同化のための一つのアイテムとさえいえる。

朝鮮と台湾の相違は、日本人としての在り方にあろう。台湾人には、日本家屋を再現した上で作法を教え、和服を着せた。しかし朝鮮では作法室にも和服にも特にこだわりはない。それは先にも述べたように、家事と「作法」「花」「茶」を一連のものと捉え方であり、アイデンティティは「作法」というよりも家政の在り方にあつたといえる。

学校制度上のことに目を向けると、朝鮮において日本人の学校に朝鮮人が入学することは、台湾同様にその何割かはあつたが、台湾の場合、台湾人を対象とする名門校台北第三高等女学校、台南第二高等女学校に、一割から三割程度の日本人も在学していたが、朝鮮の場合、京畿公立高等女学校、平壤公立西門高等女学校、釜山港公立高等女学校ともに日本人の入学者はなく、いっぽうで「内鮮一体校」が作られた。また、日本人を主とする高等女学校において台湾は四年制であつたが、朝鮮では時期尚早といわれながらも昭和初期に五年制を導入している。しかし多くの学校は四年制であつた。さらに京畿公立高等女学校の校長は、初代と第五代は朝鮮人であつたという相違もある。

今後の課題として、学校制度上の相違も念頭に、総督府教育関係者の言説の検討、総督府刊行物、新聞、雑誌からの考察、また韓国における研究（ハングル）については今回、各学校の周年史、茶道に関する著作に止まったため、今後は論文にも当たっていく。



注

- (1) 『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、一九九六年。
- (2) 『旧韓国』朝鮮の「内地人」教育 九州大学出版会、二〇〇五年。  
『朝鮮植民地教育政策史の再検討』九州大学出版会、二〇一〇年。
- (3) 『植民地地下朝鮮における龍谷高等女学校』『ジェンダー研究』第三号、  
お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報、二〇〇〇年、「植民  
地地下朝鮮における淑明高等女学校——抗日学生運動を中心に」『岐阜  
大学留学生センター紀要 二〇〇二年号』岐阜大学留学生センター、  
二〇〇三年、「植民地地下朝鮮の女学生——進明高等女学校を中心に」  
『同紀要 二〇〇六年号』二〇〇七年、「植民地地下朝鮮における京畿高  
等女学校（上）」『同紀要 二〇〇七年号』二〇〇八年、「植民地地下朝  
鮮における京畿高等女学校（下）」『同紀要 二〇〇八年号』二〇〇九  
年、「日本植民地時代における朝鮮の高等女学校に関する実証的研究」  
平成一五——一六年度科学研究費補助金研究成果報告書、平成十七年、  
『海峡を越えて——京畿高等女学校の思い出』春風社、二〇〇八年。
- (4) 『朝鮮女性の知の回遊——植民地文化支配と日本留学』山川出版社、  
二〇〇五年。
- (5) 「日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と内鮮一体の実態  
(1)」「淑徳大学国際コミュニケーション学部学会機関誌 国際コミュ  
ニケーション学会 国際経営・文化研究」一五巻二号、二〇一一年、  
『同(2)』『同誌』一六巻一号、二〇一一年、「同(3)」「同誌』一六巻二号、  
二〇一二年。
- (6) ほかに、李榮娘「近代移行期における朝鮮の女性教育論」、洪金  
子『『基督新報』にみる植民地朝鮮の非公式的女性教育』、いずれも  
早川紀代ほか編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、  
二〇〇七年所収、徐楨完「植民地朝鮮における能——京釜鉄道開通  
式典における「国家芸能」能」『植民地朝鮮と帝国日本——民族・都  
市・文化』勉誠出版、二〇一〇年など。また、韓国（ハングル）に  
おける当該期の茶道教育の研究として、\*金明培『『茶道学』学門社、  
一九九一年があるが疑問点も多い。  
以下、\*印はハングルの書物をさす。
- (7) 拙著『『花』の成立と展開』和泉書院、二〇〇七年、三八一—  
三八六頁。拙稿「近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養——い  
け花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して」上村敏文・笠谷和  
比古編『日本の近代化とプロテスタンティズム』教文館、二〇一三年  
に詳しく述べている。
- (8) 拙稿①「植民地台湾の高等女学校と礼儀作法空間」『民族藝術』第  
二五号、民族藝術学会編、二〇〇九年、拙稿②「植民地台湾の女学校  
といけ花・茶の湯」『芸能史研究』第一八九号、二〇一〇年、拙稿③  
「从花道看「満洲」都市女性的文化与教育」郭俊胜・胡玉海主編『張  
学良与九一八事变研究』遼寧人民出版社、二〇一一年、拙稿④「サイ  
パン高等女学校と日本の伝統的文化の受容」『マイグレーション研究  
会会報』第七号、二〇一二年による。
- (9) 詳しくは、前掲注(7) 拙著『『花』の成立と展開』一七八—  
一七九頁。
- (10) 『朝鮮教育要覧』朝鮮総督府内務部学務局、大正四年（復刻版『日  
本植民地教育政策史料集成（朝鮮編）』第一巻、龍溪書舎、一九八七  
年）。
- (11) 『学校一覽 第一回』明治四二年五月調査、釜山居留民団立釜山高  
等女学校。『釜山教育五十年史』釜山府釜山教育会、昭和二年、一—  
六〇頁。「沿革史」（昭和九年まで）。『創立三〇周年記念号』からの抜  
粋『諸 会員名簿』釜山高女渚会、平成六年。  
いっぽう、官立釜山中学校は大正二年四月創立、高等女学校よりも  
開校が遅いのは男子の場合、年頃の女子よりも親元を離れることに危

機感・抵抗感がなかったためである。

- (12) 釜山公立高等女学校編『釜山公立高等女学校資料』巻一、釜山公立高等女学校、昭和一〇年、九五―一五三頁。前掲注(11)「沿革史」。通常「内地」では、四年制から五年制に変わった場合、原則として在校生も五年制に変えられたが、朝鮮では在校生はそのまま四年制として卒業した。

- (13) 前掲注(12)『釜山公立高等女学校資料』巻一、六八頁。

- (14) 釜山公立高等女学校編『釜山公立高等女学校資料』巻三、釜山公立高等女学校、昭和一〇年、五頁。

- (15) 『釜山公立高等女学校一覽 第三回』大正四年三月調査、四五頁、七〇頁。福田須美子「朝鮮における最初の高等女学校——釜山高女学校」前掲注(3)『日本植民地時代における朝鮮の高等女学校に関する実証的研究』四一頁。

- (16) 前掲注(14)『釜山公立高等女学校資料』巻三。

- (17) 釜山公立高等女学校編『釜山公立高等女学校資料』巻二、釜山公立高等女学校、昭和一〇年、一六六頁。

- (18) 二〇〇九年一〇月二〇―二一日、佐賀県唐津市における聞き取り・史料調査による。本調査は大河内はるみ氏のご尽力を得た。記して謝したい。

- (19) 前掲注(12)『釜山公立高等女学校資料』巻一、一五七―一六九頁。

- (20) 「創立二十五周年記念沿革略誌」「白楊 創立二十五周年記念号」第二九号、京城第一公立高等女学校、昭和八年。

- (21) 前掲注(20)『白楊 創立二十五周年記念号』口絵、「記念展覧会概況」「余興」ほか。

- (22) 京都府立第一高等女学校では大正期以降、「花」「茶」について学科目「家事」「作法」の一部として取り入れたほか、放課後志望者に修得の機会を設けるものの、実際には本科卒業後、趣味娯楽的要素を含む

みつつも女性のたしなみや花嫁修業として修得されるもので、昭和初期戦時下には修得に修養という名目も加えられている。「宮家も修学した高等女学校——京都府立京都第一高等女学校」前掲注(7)拙著『花』の成立と展開」三三三頁。

- (23) 一九四一年三月卒業の方から卒業アルバム、写真、各種賞状、同窓会誌『白楊』(戦後発行分)等の史・資料を見せていただくとともに、何度も聞き取りをさせていただき、最後に次のようなお話も伺った。一九四〇(昭和一五)年頃、龍山の練兵場前にあった傷病兵病院への慰問を梨花高等女学校の生徒(朝鮮人)と一緒に行っていた。梨花高女の寄宿舎へも招かれて遊びに行ったが、それは日本人の生徒との交流を望むような形としてであった(二〇一〇年一月、於滋賀県大津市)。

- (24) 南野照子「あの頃の第一高女生の私」『白楊』第五八号、京城第一公立高等女学校白楊会、二〇〇七年、一三頁。

- (25) 詳細は、拙稿「外地の女子教育——京城第一公立高等女学校」前掲注(7)拙著『花』の成立と展開」二九―二九六頁を参照されたい。同校作法室の写真は、前掲注(8)拙稿①「植民地台湾の高等女学校と礼儀作法空間」九六頁に掲載している。白楊会全国大会二〇〇六年五月二五日、於ホテルニューオータニ大阪、同大会二〇〇八年五月二三日、於東京帝国ホテル(創立百周年記念・同会全国大会はこの回にて終了)に参加させていただき、当日多くの卒業生の方々からお話を伺うとともに後日、個人的にお目にかかりお話を伺った。

- (26) 永島広紀「戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学」ゆまに書房、二〇一一年、第一章に詳しい。また、前掲注(6)金明培『茶道学』三七七―三七八頁においても述べられている。

- (27) 同校卒業生、同塾終了後同塾活動に参加した、源平清子氏からの

- 二〇〇六―二〇一〇年の四年間にわたる聞き取り、書簡による。
- (28) 二〇一二年七月、書簡、聞き取りによる。
- (29) 高等女学校研究会プロジェクトチーム『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.6』（韓国的女子高等普通学校・高等女学校の分）一九九九年、一四八―一四九頁。
- (30) 光州公立高等女学校編『本校の教育』光州公立高等女学校、一九三五年。
- (31) 前掲注(29)『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.6』五四―五六頁、五八頁。この聞き取りは朝鮮人卒業生によるもの。
- (32) \*『松涛』元山公立高等女学校同窓会、一九九九年。
- (33) \*『京畿女高五拾年史』京畿女子中・高等学校、一九五八年、\*『京畿女高八十年史 一九〇八―一九八八』京畿女子高等学校・京畿女高同窓会、一九八八年、一三二頁（沿革）、\*『京畿女高九十年史』一九九八年、\*『京畿女高百年史』二〇〇八年。
- (34) 白松とは、樹皮が灰白色の松で高木、中国原産。神聖な木とされ王宮・墳墓・寺院などにある。
- (35) 釜山港高等女学校や元山高等女学校、台湾の台南第二高等女学校などの写真にある。
- (36) 二〇〇九年八月二二日、慶雲会（京畿高等女学校同窓会）総会、於京畿女子高等学校同窓会館における聞き取りから。安韓順、朴貞淑、成河吉、白行鎮氏ほか。
- (37) 柳壽仁氏（三六期生）によれば、矢島教諭はいつも和服であった。京美人で、作法の時間に、畳のへりを踏まないで足をスッスツと運ぶ、お菓子を出されたらお懐紙を出してお菓子を乗せて、お菓子を囁んだら歯の跡がつく、見苦しいからもう一度噛みなさいと教わったという。
- (38) 「生花」とは江戸後期に確立した様式（花型）で、通常床の間に置く。「盛花」「投入花」は大正期に確立した様式（花型）で、床の間以外、茶の間などにも置くことができ、昭和初期流行していた。「生花」にくらべて修得し易く、置く場所を余り選ばず、日本家屋以外でも飾り易いものであった。
- (39) 前掲注(36)慶雲会における聞き取りから。
- (40) 二〇一〇年二月、ソウル華公会における、任華公氏（三〇期生）への聞き取りから。
- (41) 二〇〇九年九月二六日、慶雲会九月例会、於京畿女子高等学校同窓会館。金世永、金益朱、李英珠、閔丙琳、李英銀氏ほか。
- (42) 二〇〇九年一〇月、羅英均氏へのEメール、聞き取りによる。
- (43) 前掲注(29)『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.6』三八頁。
- (44) 二〇〇九年二月、前掲注(37)柳壽仁氏への聞き取りから。於ミレニアムヒルトン・ソウル。
- (45) 二〇〇九年六月八月、高憲星氏への電話、ファックス、Eメール、書簡による聞き取りによる。
- (46) 二〇〇九年度小林善帆作成のアンケート。以下、「アンケート」と記す。
- (47) 金州城（山川草木轉荒涼 十里風腥し新戰場 征馬前まず人語らず 金州城外斜陽に立つ）。
- (48) 二〇一一年一月、柳壽仁氏からの聞き取りによる。
- (49) \*『慶南女高六十年史』慶南女子高等学校、一九八七年、「沿革大要」『会誌』創刊号、釜山公立女子高等普通学校、昭和七年。
- (50) 『会誌』創刊号、第二号、釜山公立女子高等普通学校、昭和八年、『白梅（会誌）』第三号、釜山公立女子高等普通学校、昭和九年、『白梅（会誌）』第四号、昭和一〇年。
- (51) 二〇一〇年二月一六日、東横インホテル釜山中央洞にて、一〇期生金甲イン氏への聞き取り。同氏は一九二二年生まれ、一九三六年入

学、一九四〇年卒業。金東建氏同行。

- (52) 二〇一一年五月二〇日、東横インホテル釜山駅1にて、金蕙媛氏（一九二七年生まれ）への聞き取り。

- (53) 「平壤女子高等普通学校 沿革概要」「柳苑」第三六号、平壤女高・西門高女同窓会、二〇〇八年、一三五—一三六頁。

- (54) 二〇一一年五月一九日、開校九七周年西門高等女学校同窓会、於ソウル五道廳での聞き取り調査。劉榮善、宋錫妍、姐永金、趙英妊氏ほか。森万佑子氏同行。

- (55) 『卒業写真帖』二四回生、昭和一五年三月卒業。

- (56) 二〇一一年一月二六日、於ソウルロッテホテル、同二七日、於安養市（ソウル近郊）における趙英妊（日本人名・徳山照子）氏への聞き取り調査による。金亨淑氏同行。

- (57) 『文教の朝鮮』昭和一二四年四月号（通巻一四〇号）、朝鮮教育会、一九三七年四月（復刻版『文教の朝鮮』六五、二〇一一年、オークラ情報サービス）。

- (58) 『釜山教育五十年史』釜山府釜山教育会、昭和二年、七八頁、九八頁。

- (59) 『沿革大要』『日新』第一〇号、東萊日新女学校校友会、昭和一三年。

- (60) 当校については、\*『東萊学園九十周年記念画報』学校法人東萊学園、一九八五年、\*『東萊学園一〇〇年史』学校法人東萊学園、一九九五年を参考にした。

- (61) 「学科目課程及毎週教授時数表」「日新」第七号、東萊日新女学校校友会、昭和一〇年、『日新』第九号、東萊日新女学校校友会、昭和二年、前掲注（59）『日新』第一〇号。

- (62) 前掲注（59）『日新』第一〇号「職員」一覧によれば、この教師は、昭和一二四年四月着任、担任学科図画・習字・手芸の教員、堀内日奈生であったことがわかる。同校の日本人教員は、同氏と国語担当教員、西川留吉の二名のみであった。修身は朝鮮人教員、李鍾貯が担当して

いた。

- (63) 二〇一一年五月二〇日、金蕙媛氏への聞き取りによる。金東建氏同行。

- (64) 二〇〇九年度アンケート調査による。田元順氏（一九二八年生まれ、一九四〇年入学）。

- (65) 『第七回卒業記念写真真帖』東萊日新女学校、一九三三年。

- (66) 『第四回卒業記念写真真帖』東萊高等女学校、一九四四年三月。

- (67) 「写真帖」（個人写真）東萊日新女学校、一九二五—三六年、『記念写真帖』東萊日新女学校校友会、一九二七—二九年。

- (68) 二〇一一年一月二七日、ソウル教育博物館（正説図書館）史料調査による。

- (69) 前掲注（7）拙稿「近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養—いけ花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して—」による。

- (70) \*『進明七十五年史』進明女子中・高等学校、一九八〇年による。同校の史料調査につき崔眞善氏（滋賀県立大学大学院）のご尽力を得た。記して謝したい。

- (71) 同右、八九頁、九三頁、一二—二五頁。詳細を述べれば、ほかに「修身」が二時間なのは、一九二二年の三年（三年制）、一九四三年の三年・四年においてもであり、高学年であることから考えても、それも「作法」が教えられたと思われる。

- (72) 高等女学校研究会プロジェクトチーム『高等女学校に関する調査資料 No.10』（韓国の女子中等教育関係）二〇〇四年、三四頁。聞き取り対象者は一九四六年に「進明」を卒業している。

- (73) 英親王は朝鮮李王朝最後の皇太子。名は垠、父は高宗、母は嚴妃。純宗王の腹違いの弟にあたる。一九〇七年一一歳で日本に強制的に連れて行かれ、教育をうけた。梨本宮守正王の娘方子と政略結婚を強いられ妻とした。一九六三年韓国に帰国。

- (74) 前掲注(70) \*『進明七十五年史』一五二頁。
- (75) 淵沢能恵(一八五〇(嘉永三)——一九三六(昭和一一))は岩手県生まれ。一八七九年二九歳で渡米、一八八二年帰国、同志社女学校英書科在学、一八八五年中退。東洋英和女学校、熊本女学校などで教鞭をとる。一九〇六年、明新女学校設立に参画、学監、理事などを歴任。在朝鮮愛国婦人会評議員、組合教会婦人会長、矯風会支部長。勲六等宝冠章ほか受賞、八六歳で永眠(宮澤正典「同志社人物誌一〇二 淵沢能恵」)。淵沢に関し、『婦女新聞』(復刻版、不二出版)大正六年八月三十一日、大正一五年六月二〇日、昭和三年七月一日、逝去後昭和十一年二月三日、同年三月一日、八日、一五日の記事がある。
- (76) 「沿革及現状の大要」『財団法人淑明女子高等普通学校一覽』大正七年一二月調。\*『淑明七十年史』淑明女子中・高等学校、一九七六年ほかに\*『淑明九十年史』淑明女子中高等学校、一九九六年、\*『淑明百年史』淑明女子中高等学校、二〇〇六年を参考にした。
- (77) 前掲注(7)『花』の成立と展開」第二章第七章「同志社女学校」二八三—二九〇頁。
- (78) 前掲注(76) \*『淑明百年史』一〇九頁、\*『淑明写真集』淑明女子中高等学校、二〇〇九年、一二頁。
- (79) 一九二九—三一(昭和四—六)年に淵沢能恵と同居した川又タキ氏(フェリス和英女学校卒、一九一〇年生まれ、現在一〇一歳)への二〇一二年三月—四月の聞き取り、書簡による。この調査に関し、同氏孫の小林由美子様のご尽力を得た。記して謝したい。この和室は、村上淑子『淵沢能恵の生涯——海を越えた明治の女性』原書房、二〇〇五年、一一九頁にキリスト教矯風会の集まりとしてその和室(座敷)の写真が掲載されている。淵沢とともに川又タキが写っていることから一九二九—三一(昭和四—六)年にはその和室があったことがわかる。
- (80) 前掲注(76) \*『淑明七十年史』三八、一二五—一二九頁、一五七頁。
- (81) 同右、一七五—一七六頁。
- (82) 二〇〇九年度実施アンケート、李康順、白仁鎮、卞彦皓氏(入学順)による。
- (83) 生徒は既婚女性、当初授業は英語のみであった。
- (84) \*梨花女子高等学校編『梨花百年史 一八八六—一九八六』梨花女子高校、一九九四年、五四—五七頁。\*梨花百年史編纂委員会編『梨花百年史資料集』梨花女子大学出版部、一九九四年、一七一—一八頁。
- (85) 前掲注(84) \*『梨花百年史』七五頁。
- (86) 同右、二六〇—二七〇頁、二七四頁。
- (87) 同右、一五四、二六九—二七〇頁。
- (88) 二〇一〇—二〇一一年度聞き取り調査による。
- (89) 前掲注(84) \*『梨花百年史』七四—七四二頁。
- (90) 前掲注(8) ②「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」四二頁。
- (91) 同校の史料所在について高恵玲先生にご教示を得た。記して謝したい。
- (92) \*閔淑鉉・朴海環『梨花一〇〇年野史——写真でみる梨花一〇〇年』知人社、一九八一年、口絵。前掲注(6) \*『茶道学』三七五頁。
- (93) 『朝鮮開教五十年誌』京城府南山町本願寺別院・朝鮮開教監督部、昭和二年、一七五頁、一八九頁。現在、東明女子中・高等学校による同校の学校史(<http://www.dongmyunggirls.ms.kr/down/index.jsp>)には、「一九二二(大正一〇)年六月、純宗下賜金により向上技芸学校設立」とあるが、一九四二年入学の在校生・また当時教員をしていた者(ともに朝鮮人)からは、そのような話は聞いたことがなかったという。当時の浄土真宗大谷派の記録にもない。しかしその時点で何らかの教育的活動が行われていたことも推察されよう。

(94) 『教化研究』一三〇号、一三一号、真宗大谷派教学研究所、二〇〇四年、一七五頁。

(95) アンケート調査をもとに二〇一一年一月二六日、ソウルロッテホテルにおいて聞き取り。金亨淑氏、一九二九年生まれ、一九四一年同校入学。そのほかアンケートから、一九三九年入学の李点姫氏によれば、音楽、裁縫が思い出に残っているという。

(96) 同校校舎は、『朝鮮と建築』第参輯第一〇号、朝鮮建築会、大正一三年によれば、「大正十年火災のため焼失、(中略)予算十五万円にて新築に決定、田中組の請負で、駒田府技師設計、大正十三年十月竣工、本館は近代様式鉄筋コンクリート三階建、建坪二百四坪教室二十一室、屋上庭園あり、講堂は百十六坪建物は文化式木造平家造りで耐火と防寒には細心の注意を払ってある。先に落成した(京城)第二高女、清雲洞普通学校に次ぐ立派な建物」であったという。

(97) 神武天皇祭は四月三日。「行事の花材」はアンケートに記入され拙宅へ郵送されたものによる。またそれをもとに二〇一一年一月二六日、ソウルロッテホテルにおいて聞き取り。金柔順氏、一九二九年生まれ、一九四二年同校入学。

(98) \*『舞鶴七十年史』舞鶴女子高等学校・舞鶴女高同窓会、二〇一〇年。\*『舞鶴六十年史』舞鶴女子高校・舞鶴女高同窓会、二〇〇〇年。各聞き取り調査による。同校の調査において、校長、同窓会長のご尽力を得た、記して謝したい。

(99) 二〇一一年八月、二〇一二年四月―五月、史料・聞き取り調査。箕輪俊子氏(一期生)ほか。

(100) 二〇一一年八月、於東京、聞き取り調査。

(101) 二〇一二年五月、同校元教諭池田(旧姓上田)照子先生からの聞き取り、書簡。

(102) 二〇一一年五月二日、於ソウルプレジデントホテル、呉春煥(日

本人名呉吉)氏への聞き取り調査。森万佑子氏同行。

(103) 二〇一二年五月、聞き取り調査。山之城優貴子氏(一期生)。

(104) 二〇一二年五月、聞き取り調査。岡崎光代氏(一期生)、安藤道子、大野民子氏(二期生)。

(105) 同校についての各聞き取り調査による。

(106) 二〇一一年五月一八日、於舞鶴女子高等学校歴史館、史・資料、聞き取り調査。同校同窓会李花子氏の談話による。森万佑子氏同行。

(107) 前掲注(8) 拙稿②「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」四三―四四頁。

(108) 前掲注(8) 拙稿①②参照。植民地台湾の作法室は、一軒家ないしは一軒家風につくられていた。

## 謝辞

史料調査に関し慶雲会(京畿高等学校同窓会)、白楊会(京城第一公立高等女学校同窓会)、渚会(釜山公立高等女学校同窓会)、慶南女子高等学校資料室、舞鶴女子高等学校・同窓会、平壤公立西門高等女学校同窓会、東萊女子高等学校・同資料室、淑明女子高等学校・同窓会、進明女子高等学校・同窓会、培花女子高等学校、梨花女子高等学校博物館ほか各女学校・高等女学校卒業生・教員、その御家族様各位、韓国国立図書館、ソウル大学校図書館、梨花女子大学校図書館、ソウル教育博物館、真宗大谷派教学研究所、玉川大学教育博物館、李相燦先生(ソウル大学校)、呉京煥先生(釜山大学校)、金貞禮先生(全南大学校)、高(全)蕙星先生(イエール大学)、太田孝子先生(岐阜大学)をはじめとして、調査にご協力くださいましたすべての方々に、深く感謝を申し上げます。

また韓国語翻訳・通訳として森万佑子氏(ソウル大学校・東京大学大学院)、金東建氏(成均館大学校)、朴美貞氏(日文研)、金ボンス氏(長岡造形大学)、朴淳希氏(蔚山大学校)のご協力を得ましたこと、松田利彦

先生をはじめとして日文研共同研究会松田班の諸先生方から貴重なご教示を賜りましたことを、記して謝します。

本稿は、人間文化研究機構「日本関連在外資料調査研究」朝鮮班、ならびに科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、課題番号二六五三一―）の助成を受けた研究成果の一部である。